不安・恐怖

加能作次郎自筆原稿

西垣文庫
文庫10
8832

42

不安・恐怖

加藤仲次郎

大震災の後、所々を見た所、未だに自分の生命やそれに対して、十分に安心出来ない。

不安恐怖の感じが抜けきらず、どうもそわそわしていらいらする。全く揺り所のない、不安な気持で、やっと一日々々を送り通して居る有様である。

それにしても、何となく、小恐ろしい感じ
がつたらうし、何人も、その噂をまで、あん
なおろしい感傷すべき事の起らうとは考へ
ぬ。殊にしかつたらうし、又、過きたつた今
とうつては、只、夢のやうな地獄か抜け
返りたるごとき心地であらう。

[illegible]

[illegible]は五日目になつて、やうと
第らかんが抜けいたので、麹町、[illegible]
橋、神田方面の大惨害の跡を絶巡つて見たが、
そのあまりに悲傷となる物凄い光景に、皆々

為き果れるの外、一点の言葉も出さずかつた。

第十六年の文明を待つて事初の大[illegible]、新幻が以後十限り其後たる其工と化して[illegible]つた。と[illegible]、既至明のあなりに見驚してそのあから、[illegible]

[illegible]は[illegible]は[illegible]は[illegible]まる

で傳説の若[illegible]思ひ様つて[illegible]みるやうで、[illegible]とうし[illegible]にあつたことを[illegible]は思はれ[illegible]あいだ[illegible]つた。文化も

富と、科学の力と人智と、見た一瞬の大自然の一瞬間で、跡形もなく根こそぎ引つくり返[illegible]

[illegible]暁く果敢なく[illegible]され、神像[illegible]

たことに感謝するとともに私はこの
後私のあとを追ふ、只この現実の事実の前に驚愕する
ばかりであつた。

×

実多
本当に
大多あることだつた、
恐ろしいことだつた。
というのは外に、何の
主要な
未だ
何の
こうもの
まるまるよい、そして自分が
悪い
何の
欲しいの
何を
不満
不安もなく、人に安全を事たつた幸を祈
を乞ひ、有難く思ふとは此の事
の転ふく思ふとは此の事

の同晩が一緒しつぶされたり、焼け死んだり、ゆくくしを焼き死に方をなし、第十一万の市民が、家を焼かれ、妻と子を失ひ、親と失ひ、親に離れ、夫を失ひ、妻と子を失ひ、所を異にするやうな悲惨を見たりゆいたりすると、何かかうして生地にもきて居るのが、それらの人達に対して申訳のないやうな情まないやうなあやまりをしてゐるやうな。

仕事の理由もおく、只だ何か違つてゐたといふ事、或が事とも言ふ事とも言ふ事との様な出来事とか、それが運命といつてなるべくすで

なか、

何なか多延おかるの解お益かして、あらゆる

い。同時に今日の日ふの幸福が味して幸福で

はあく、安全がかかしも安全でよく、いつ何

時、今日も此ほんも同じやうな災厄が自分

の上に襲つて来ないとも、ものでもないと思ふと、

異常な不安と恐怖とを感ずるを得ない。

に堪えしい時勢に、厭世的な気持にもなつて

来る。震火災の日、次々と、日夜数々として

て起る強震や、火災の惨状や、種々の缺乏や、

さまざまの流言蜚語やの為に、大

三越特製 A

大きい、嵐だと思ひながらも、夢は見て、多
勢の幼子いを伴走をおつた自分は、自分を
はじめ他子の身の上を案じ焦って、みんなもさ
ぞ、私の不安恐怖に駆られ、
警報きはまる言ひ方だが、それ位の会ちら
寝巻を裸に焼け出されるかも知れぬ、
の罹災者と不幸な出しみを共にした方が、
と系愛で幸福だつたかと知れないとさう思つ
た位だつた。

人々のあほそうな系がが逃げ出してゆつが、

用紙の生産とあり、かしも教えんお
らあい相あって居れあ、何れか訳のわからぬもの
に振り立ってたる、ねお全く振り訳かれの
せおいのたいとをあ何事の痛切へ
且つ非常に
[illegible]の拙く為せざるを得ず。
（六月四十二日）